

テーマ2

3D-CTを用いた上顎埋伏犬歯の臨床

～その診断と早期治療について～

カノミ矯正・小児歯科クリニック 仲村 陽平



略歴

2005年 昭和大学歯学部卒業
同 年 昭和大学総合診療歯科入局
2006年 カノミ矯正・小児歯科クリニック（姫路市）勤務
同 年 昭和大学歯学部小児成育歯科学教室研究生
現在に至る

小児歯科臨床において、時に永久歯が萌出期を過ぎても、顎骨内に留まっている状態に遭遇します。この場合、埋伏歯として診断が下され、処置される時期はいつなのでしょう？

それを明確にしていないと、「様子を見ましょう」的に問題を先送りにし、結果的に最適な時期に放置され、アンキローシスや他の永久歯の歯根吸収に遭遇することもあるのではないのでしょうか。もし、埋伏の兆しを早期に予測し、原因を除去出来れば、埋伏歯に起因する諸問題は解決されるのではないかと考えます。

そこで今回は、埋伏頻度が高く、バリエーションのある上顎犬歯について考察しました。一般に上顎犬歯の特徴としては、歯冠が紡錘形で、歯根は長く、顎骨内に深く植立しており、他の歯よりもう蝕や歯周病で失われることも少ない歯で、また、永久歯の中でも寿命の長い歯です。そのため埋伏犬歯を口腔内へ萌出誘導し、本来の機能を回復する事が出来れば、患者のQOLは少なからず向上することが期待できます。

「埋伏」という状態に至る過程には、複合的な要因のかかわりを想像しますが、埋伏を生じさせないためには、事前の予測が大切です。それには、まず埋伏に至る過程を知る必要がありますが、これまでの上顎犬歯に関する数々の報告の中で、埋伏に至る原因については明快な解答は報告されていません。それはいままで、埋伏の病態を把握する場合、単純エックス線やパノラマエックス線画像を多用し、歯根の状態や歯胚の位置、周囲組織との関連性を診ていましたが、これらの2次元的評価では、顎骨全体と犬歯の位置関係の明確な特定には至らないことがその理由だと考えます。

近年、歯・顎顔面用エックス線CT装置（以下3D-CT）が開発され、顎骨内を外科的侵襲なく3次元画像にて観察する事が可能となり、これまでの診査では得られなかった犬歯とその周囲組織との位置関係を診ることが容易になりました。そのおかげで、埋伏状態とその原因を多角的に検討して、臨床的指針を得ると共に、未然に埋伏を予防する事が症例により可能となりました。

今回のテーブルディスカッションは、この3D-CTから得られた多くの情報を基に、上顎犬歯の埋伏の原因とその要因をまとめ、また、若干の症例と共に皆様方とディスカッションをしたいと考えております。